

Title	植民地領有の目的(二)
Author(s)	山本, 美越乃
Citation	経済論叢 (1919), 8(5): 611-615
Issue Date	1919-05
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/127526">http://dx.doi.org/10.14989/127526</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 植民地領有の目的 (二)

山本美越乃

(三) 勞働效程の増進、近世の始め以來植民事業の進捗に伴ひ各國の最も苦心したる所のものは、植民地の富源の開發に必要な勞力の不足を如何にして補充すべきかとの問題はれなりしなり、彼の人道上の見地よりせばす時も默過すべからざる奴隸賣買の制度の如きも、全く勞力缺乏の結果窮餘の策として實行せられたるものなることは、當時植民地に於ける熱心なる基督教の宣傳者等に依りて該制度の推獎せられたるに徴するも明かなりとす(註)。

(註) "It was not from the general depravity of fallen human nature that the institution of negro slavery took its rise, but from the economic exigencies of colonial life. It is among the commonplaces of history that the introduction of negro slavery was first effectively suggested by the Christian missionary, Las Casas who had well earned his title of the Protector of the Indians."<sup>(1)</sup>

由來文化の程度の幼稚なる社會に於ては住民の慾望も亦極めて單純にして、生活の爲めに勞働に従事するの必要を感じざるが故に、彼等に勞働を要求せんと欲せば勢ひ強制的の手段に出づるの他途なく、是れ近世の植民的活動の當初より西班牙の如きは既に土民を強制的に業主に分配して勞働に従事せしむる所謂レパチメントス (Repatriamientos) の制度を採用するに至れる所以なりとす、然れども自ら勞働に従事せんとする意志なき者を強制して勞働に服せしむる制度は、自

(1) Egerton, The Origin and Growth of the English Colonies &c., p. 123.

由に勞働を選択し且自ら進んで之に従事する任意勞働の制度に比較する時は、其の效程上に著しき差異の存することは明かにして、一切の勞働は能ふ限り各人の自由に委ね、其の好む所に隨ふて之に従事せしむるの最も有利なるべきは勞働效程上自明の理なり(註)、故に苟くも堅實なる産業上の發展を期せんと欲せば、任意勞働制度の下に可及的效程の大なる勞力を使用して富源の開發に任せしむることに注意せざる可からず。

(註) "Stewart, Turgot, and Smith, all agree in thinking, that the labour of the slave is dearer and less productive than that of the freeman.—Their arguments amount to this: a man, that neither works nor consumes on his own account, works as little and consumes as much as he can: he has no interest in the exertion of that degree of care and intelligence, which alone can ensure success &c."

而して植民地の領有の一國の勞力の效程上に及ぼす影響に關しては、(一)母國及植民地共に人口稠密なる場合、(二)母國及植民地共に然らざる場合、(三)母國の人口は稠密なるも植民地の人口は然らざる場合、(四)植民地の人口は稠密なるも母國の人口は然らざる場合等に應じて必ずしも同一ならずと雖ども、一般的に之を論ずる時は凡そ勞力の效程は文化の程度に比例すと言ふも不可なきが故に、植民地土民の勞力は其の效程上より之を觀察する時は母國人に及ばざるを常とす、從て植民地の人口狀態富源の開發に必要な勞力を供給するに足らざる場合は勿論、假令人口稠密にして勞力に餘りある場合と雖ども、彼等の因襲的に従事しつつある業務に對する場合の他は、勞力の效程は一般に小たるを免れず、是れ蓋し既に述べたるが如く文化の程度の幼稚なる地方に於ては土民の慾望極めて單純にして、毫も生活程度の向上を計らんとするが如き念なく、小成に安

(1) Say, J. B. A Treatise on Political Economy, bk. I, chap. XIX, "Of Colonies and their Products."

んじ倫安を事とし、有形上にも無形上にも進歩發展の氣力を有せざるより生ずる自然の結果たり、エノック氏が其の著『熱帶論』中に "In most tropical lands the cry of the white master is for 'more labour'. But, dwelling in the rudest habitations, with insufficient food and clothing and lack of hygienic conditions and general amenities, the native in many cases is not likely to increase in numbers or intelligence." <sup>3</sup> と言へるは、必ずしも熱帶地方の土民にのみ特有の現象に非ざるなり。

故に植民地土民の勞働の效程を増進せしめんと欲せば、斷えず新たなる刺激と慾望とを感じ得べき機會に接觸せしめ、有形的には彼等の生活狀態を改善し、無形的には其の智識を啓發することに依りて、成るべく速かに文化的生活の眞意を理解せしむるより急なるはなし、而して此の目的を達する捷徑は能ふ限り文明國民たる母國人の移住を奨励すると共に、彼我の交通を益々密接ならしめんことに努むるに在り、(斯かる場合に假令植民地の人口は稠密なりとするも、其の勞力の效程は極めて小なるが故に、富源の開發には尙ほ母國人の勞力を必要とすべきもの甚だ多し)、此の如くして母國及植民地間の交通愈々頻繁となる時は、各種の方面より植民地土民に文化的生活の刺激を與へ其の慾望を増進せしむるに至るべく、慾望の増進換言せば彼等の物質的及精神的生括條件の進歩は自ら勞働上にも影響を及ぼし、其の效程を大ならしむるに至るべきや必せり、又假令斯かる方面より勞力の效程を増進せしむることなしとするも、母國人に依る植民地の富源の開發は新たに土民に職業を與へ其の收入を増加せしむる原因となるが故に、此の方面より彼等の生活狀態を改善せしめ延て勞力の效程を増進せしむることを得べし。

(1) Enock, C. R. The Tropics, p. 432.

以上は植民地の領有が其の土民の勞働效程上に及ぼす影響に關して考察したるものなるも、更に之を母國人の勞働效程上に及ぼす影響に就きて考ふるも亦相似たるものあり、母國に於ける人口の増加率小なるか或は其の面積に比して人口少き國に於ては、植民地の領有が母國の勞力の效程上に及ぼす影響は、單に對植民地輸出貨物の生産の増加に伴ふ勞働所得の増加の方面より之を期待し得るに過ぎずと雖ども、然らざる國に於ては植民地の領有は常に母國に於ける過剩勞力の調節に便を與ふることに依りて、間接に勞働の效程を増加せしむるのみならず、普通植民地土民の勞力は到底母國人の勞力に及ばざるが故に、母國人は植民地に於ては比較的高額の報酬を受くることを得べく、從て勞働者と雖ども漸次其の地位を進め、終には企業者の列に加はることを得る機會母國に於けるよりも遙に多きことは、移住者に刺戟を與へ直接其の勞働效程を増進せしむるの效あり、要之、植民地の領有は母國及植民地の何れの觀點よりするも、勞働效程の増進に與かりて力あることは之を疑ふ可からざるなり。

(四) 特殊生産物の供給、*"If we turn at the present time to the import lists of the world and regard them carefully, it will soon become apparent to what a large extent our civilization already draws its supplies from the tropics."* <sup>(1)</sup> 是は『熱帶支配論』の著者ベンジャミン・キッドの道破せる所にして、温帶地方に生活の本據を有せる現今の文明國民は、其の程度に於ては固より多少の差異なきに非ざるも、何れも熱帶若くは亞熱帶地方に重要な食料品及原料品の供給を仰がざるはなし、<sup>(2)</sup> 而して是等の産物の多くは如何に進歩したる近世の科學の力を以てするも、氣候・雨量・土質等の自然力の關係より温帶地方に於ては之が生産は到底不可能にして、全く熱帶又は亞熱帶地方の特有物

(1) Kidd, B. The Control of the Tropics, p. 5.

(2) Enock, The Tropics, p. 7.

たり、例へば米・茶・煙草・棉花・麻類・羊毛・皮革等の如きは温帶地方に於ても之を産せざるに非ずと雖ども、尙ほ其の主要なる産地は印度・馬來半島・印度支那・比律賓・東印度諸島・亞弗利加及濠洲等の熱帶又は亞熱帶地方にして、更に現今の文明的生活と一日も離る可からざる甘蔗・珈琲・加々阿・規尼涅・護謨・椰子・象牙・羽毛等の供給に至りては、殆んど全く熱帶地方に限らるるが如き是れなり、其の他チーク・マホガニー等の有用木材は勿論、重要鐵産物に於ても熱帶地方は金・銀の世界的産額の約二分の一、錫の世界的産額の約三分の二を産し、銅・鉛・鐵・石油・石炭等の産額に至りても亦決して少しとせず、然かも是等の産物は人口の増加及社會の進歩と共に益々其の需要を増加するも、温帶地方に於ては上述の如く之が供給の見込存せざるより、從來斯かる特殊の生産物の供給地を自國の植民地として領有せる國は益々其の領域を擴張せんとし、又未だ之を領有せざる國は新たに其の供給地の獲得に努めたることは、前世紀の末葉以後に於ける各國の植民的活動の一大要因を成せり。

植民地領有の目的が特殊生産物の供給を得んとするにあることは、啻に近世の植民的活動に於てのみならず古代及中世の植民的活動に於ても固より之を認め得べしと雖ども、古代及中世に在りては是等の特産物は多くは奢侈品又は貴重品たるの性質を有し（例へば貴金屬・寶石類・香料等の如し）、從て之が供給地を植民地として領有すべきや否やは、必ずしも國民全般の福利に關する重大問題に非ざりしも、現今に於ては是等の特産物は文明國民の日常生活に寸時も缺く可からざる必需品を構成せること既に述べたる所の如くなるを以て、之が供給地を自國の植民地として領有すると否とは、實に國民全般の福利に至大の關係を有する問題と稱せざるを得ず。